

地域シリーズ：『嵯峨祭』と大覚寺

5月最後の春祭といわれる嵯峨祭。例年5月の第3日曜日に神幸祭、第4日曜日に環幸祭が行われます。4年ぶりとなる2023年は、還幸祭が28日に行われ、2基の御輿が嵯峨嵐山一带を巡行しました。嵯峨祭は愛宕神社と野宮神社の祭礼（主催は嵯峨祭奉賛会）で、各町が繰り出す5基の剣鉾が先払いをして巡行します。これらの剣鉾は京都市登録無形民俗文化財となっており、剣鉾が5基そろって祭りは市内でここだけです。この祭りに同行し、嵯峨野や大覚寺、中之島を巡りましょう。

《ご紹介》

小倉山の東麓は嵯峨野と呼ばれる。鎌倉初期、藤原定家はそこに時雨亭を設け、小倉百人一首を編纂した。その地は定かではないが、常寂光寺、二尊院、厭離庵などでその痕跡を見ることができる。これら寺院の東に愛宕・野宮両神社御旅所がある。嵯峨祭の出発地となるこの御旅所は、嵯峨釈迦堂(清涼寺)仁王門の南90メートルのところだ。

5月28日午前10時、御輿巡行の先陣を切って、周囲を浄める剣鉾が仁王門に向かって出発した。嵯峨野一带を4年ぶりに巡行する嵯峨祭の始まりだ。中院町の「麒麟鉾」、大門町の「龍鉾」、鳥居元町の「澤瀉鉾」、小淵町・井頭町・西井頭町の「菊鉾」、天龍寺地区(龍門町・角倉町・毘沙門町の交代制)の「牡丹鉾」の5基が、剣鉾を左右に回転させる独特の差し方で沿道を浄めていく。これらの剣鉾差しは各鉾町で差し手を養成し、嵯峨祭でその技を披露する。御旅所では愛宕神社の御輿が舞殿の周りを威勢よく回り、続いて野宮神社の御輿が回る。

午前10時20分、2基の御輿が大覚寺を目指して出発した。嵯峨釈迦堂前を西に行き、愛宕街道を北に上がって嵯峨鳥居本伝建地区に入る。八体地蔵で東に向きを変え、大覚寺へと進んでいく。道中、獅子舞が泣く子をくわえ、健やかな成長を祈る。御輿が到着した大覚寺では、勅使門前で儀式が行われた後、祭りの一行は境内で午前の疲れを癒した。

大覚寺は、正式名称が「旧嵯峨御所大本山大覚寺」。平安のはじめ、嵯峨天皇が大覚寺の

➤ 御旅所を出発する剣鉾と御輿



➤ 大覚寺勅使門前



童風に
剣鉾舞う哉
嵯峨の里

前身・離宮嵯峨院を建立したことから、嵯峨御所とも呼ばれる。876(貞観18)年、嵯峨天皇の皇孫・恒寂(こうじゃく)入道親王を開山として開創し、嵯峨院が大覚寺となった。1308(徳治3)年には後宇多上皇の嵯峨御所となり、院政の舞台となったところでもある。

大覚寺の堂舎のほとんどは、1336(延元元・建武 3)年の大火や応仁の乱などで焼失したが、1589(天正 17)年に空性を門跡を迎え、衰退した大覚寺の再建にとりかかり、寛永年間(1624~44)には寺観がほぼ整えられた。1925(大正 14)年に心経殿を再建し、大正天皇即位式の饗宴殿を移築して心経前殿(御影堂)とした。

大覚寺には重要文化財建造物が 2 棟ある。一つは式台玄関東側の宸殿。江戸時代に後水尾天皇より下賜された寝殿造りの建物で、妻飾り・破風板・天井などに装飾がこらされ、正面には御所の名残りとして右近の橋、左近の梅を配している。もう一つは宸殿西奥の正寝殿。桃山時代建立の書院造りの建物で、大小 12 の部屋をもち、上段の間は後宇多法皇が院政を執った部屋である。

大正時代に再建された心経殿は宸殿の東奥にある。心経前殿(御影堂)と勅封心経殿からなり、大覚寺の歴史上重要な天皇の尊像や般若心経などが安置されており、勅使門の正面に建っている。勅封心経殿は木造の八角円堂を鉄筋コンクリートで模した建物で、設計は昭和初期を代表する住宅建築家・藤井厚二が行っており、住宅以外の珍しい作品として国登録文化財となっている。宸殿と心経前殿を結ぶ回廊は、縦の柱を雨、直角に折れ曲がる回廊を稲光にたとえ「村雨の廊下」とよばれている。

大覚寺の東に周長約 1 キロの大沢池がある。離宮嵯峨院の造営にあたり、唐の洞庭湖を模して造られた日本最古の人工の林泉(林や泉水などのある庭園)であり、庭湖ともよばれる。池のほとりに茶室望雲亭・心経宝塔・石仏・名古屋の滝跡があり、国の名勝に指定されている。

午後 1 時、大覚寺を出発した神輿は嵐山を目指して巡行した。途中、JR 嵯峨嵐山駅では北と南のロータリーに立ち寄り、嵐電嵐山駅前を渡って渡月橋を渡る。

➤ 大覚寺と広沢池



➤ 嵐山・中之島



渡月橋は、昭和に造られた鉄骨鉄筋コンクリート製の橋だが、中央が弓なりに高く、旧橋の意匠を継承し高欄が木造となっていて、嵐山をバックに京都を代表する景観を創出している。午後 3 時、嵯峨祭の一行は嵐山・中之島に向かって渡月橋を渡っていった。緑の山々を背景に赤の御輿、紫の御輿が、大勢の観光客や市民に見守られながらゆっくりと進んでいった。橋を渡りきった御輿は、威勢よく中之島になだれ込み、待っていた 5 基の剣鉾の前で鎮座した。

午後 3 時 40 分、2 基の御輿は帰路についた。渡月橋から嵯峨釈迦堂仁王門へと真っ直ぐに通じる長辻通を北に上がり、出発地の愛宕・野宮両神社御旅所へと帰って行ったのである。嵯峨祭は大勢の観光客や市民に暖かく見守られた祭りであった。

川べりに
連れ添う御輿
愛宕みる

嵐山・中之島にて